70年代以降のナイジェリア農村における 農業経営の変化

——エビヤ村の事例を通して——

安食和宏*・島田周平**

Recent Change in Agricultural Production System in Rural Nigeria —Findings from a Case Study of Ebiya Village, Kwara State—

Kazuhiro Ajiki* and Shûhei Shimada**

The Nigerian economy has experienced uncommon up-and-down during last decades; “oil-boom” in 1970s and “oil-doom” in 1980s. This sharp fluctuations in economy had very strong influence even in rural society. This paper aims to show current agricultural production system which has experienced rapid economic change since 1970. Field survey was carried out in 1989 at an Igbira village called Ebiya which is located about 20 km east of Okene, Kwara state.

At the field survey, the authors laid stress on two points. One is about agricultural production system which was done by questionnaire, and the other is about land use pattern for which the authors had measured the whole farm land of two households. The results of field survey can be summarized as follows.

1) Various crops, both root crops and cereals, are cultivated in Ebiya village, however, cassava has become the most important crop as a cash crop.

2) For land clearance and weeding, farmers are employing agricultural labor. On the contrary, traditional mutual-help-type of work has only little importance in farming.

3) Cultivated land of the two households are about 1.8 ha in extent, which are not so large even compared with the case of southern Nigeria. In both households, househeads and their sons play important role in farming.

4) There are various type of cropping, namely, cropping patterns range from single cropping to four crops combination. But cassava is planted in the largest area. The percentage of area planted cassava to total cultivated land today seems to be much higher than that of 1960s.

5) Basic pattern of annual agricultural work has not changed too much. Planting starts at the beginning of rainy season and harvesting work is done at the end of rainy season for almost all crops. However, the case of cassava is peculiar one. It is planted and harvested in various seasons.

Agricultural production system and cultivation system in Ebiya village can be con-

*東北大学理学部地理学科・大学院

*Graduate Student, Department of Geography, Faculty of Science, Tohoku University

**立教大学文学部史学科

**Department of History, Faculty of Arts, Rikkyo University

sidered to have experienced great change under the “oil-boom” in 1970s. That is to say, increased outflow of young labor from villages caused heavy dependence on employed labor in agricultural work. And increase in cultivation of cassava means that farmers have a tendency to adopt labor-extensive farming. As a result of it, cultivation system has also changed. These trends which have been strengthened in 1970s seem to continue even by the end of 1980s.

- I. はじめに
- II. 調査地の概観
- III. エビヤ村の農業経営
 - 1. 栽培作物
 - 2. 農業労働力

- IV. 事例農家の農業経営分析
 - 1. 耕作地と労働力
 - 2. 作付パターン
 - 3. 農作業暦
- V. おわりに

I. はじめに

ナイジェリアの農業生産は、1950年代～60年代を通じて、増大する人口を支持し得る順調な成長を遂げてきた。この時期には、伝統的な農業経営の下で、輸出用換金作物生産増大と食糧作物生産増大とが同時並行的に達成されてきたと考えられている（島田、1976、p.32）。

ところが70年代に入ると、ナイジェリア全土の社会経済に大きな影響を及ぼす「オイルブーム」が到来し、農業も大きな変貌を余儀なくされた。この時期にオイルブームの影響が特に明確な形でみられたのは都市部においてである。1973年の原油価格大幅引き上げ以後急膨張した政府支出のため、都市部では未曾有の建設ラッシュが生じ、新たな雇用機会が創出され、人口は急増しスラム街も急速な拡大をみた（Simmons and Obe, 1982, p. 35-53; Udo, 1982, p.1-17）。そして同時に、農村部でもオイルブームの影響を受けて急激な変化が起きていた。農業生産についてみると、カカオ、落花生、パーム製品に代表される輸出用換金作物の生産量は急減し、ヤムイモなどの食糧作物生産は停滞することになった（島田、1983, p.140-150）。農産物輸出国であったナイジェリアが、一転して食糧輸入国に転換したという事実は、この時期のナイジェリア農業にみられた変化がいかに急激なものであったかを示している。この農業生産の停滞傾向は、オイルブームの終焉以後、すなわち80年代の不況期に入っても継続している。

こうした農業をとりまく経済環境の変化の中で、

ナイジェリアの農業経営に関する研究も変化を遂げてきた。ナイジェリアの農業生産についての研究が本格化したのは、1960年の独立以後であり、1960～70年代には、現地調査に基づいた耕作形態の具体的な事例研究が数多くなされた。これらは人類学（Bohannon et al., 1968など）、地理学（Netting, 1968; Floyd, 1969; Prothero (ed.), 1972など）、あるいは農学（Stanton, 1962; Oluwasanmi et al., 1966; Uzozie, 1971; Norman, 1979など）の分野の研究者によるものであり、ナイジェリアの伝統的な農業経営形態の解明に果たした役割は大きい。そして、これらの具体的な実証データは、60～70年代に活発に議論されたナイジェリア農業生産増大の理論的説明、すなわち Boserup 理論（Boserup, 1965）や余剰はけ口理論（land-surplus theory）（Helleiner, 1966; Essang, 1973）を用いた説明にも大きく貢献した。

しかし、80年代に入ると、70年代までの研究動向とは異なる傾向が顕著になってきた。その第一は、70年代まで活発になされていた耕作形態の実証的研究の急減であり、そして第二は、70年代後半から盛んになってきた従属理論等を含む「近代化」批判論（Oculi, 1979; Shenton and Watts, 1979; Wallace, 1980など）の台頭である。70年代に顕在化した農業生産の縮小と食糧不足という事態の中で、研究者の主たる関心が具体的な実証研究から、より政策論的なものに移ったということである。言葉をかえれば、近年のナイジェリア農業研究の中心は、地理学や農業経済学的関心から離れて政治経済学の分野に移っている（Shimada,

1985, p.61) といえよう。皮肉なことに、最も農村部が激しい変化を遂げ、その記録と実態把握が必要な時に、ナイジェリアの農業研究はマクロな理論的・政策論的な議論に集中していたことになる。現在こそ、70年代以後の農村部の変化を記録する具体的な実証研究が必要である。

本研究では、このような問題意識のもとに、ナイジェリア中部に位置する一村落を対象にして、農民に対する聞き取りと耕地の実測調査とにより農業経営の実態を調査した。主に調査した事項は、栽培作物の種類とその作付パターン、農業労働力、そして農作業暦の3点である。

Ⅱ. 調査地の概観

調査地のエビヤ村は、ニジェール川とベヌエ川の合流地点から南西約50kmに位置する(第1図)。これは、クワラ州東部の中心都市オケネと、ナイジェリア初の国営製鉄所が建設中のニジェール川沿岸の町アジャオクタを結ぶハイウェイのほぼ中間点にある。エビヤ村は、植生帯からいえば南部ギニア・サバンナ帯に属し、年間降水量は約1,300mmである(Udo, 1978, p.231-233)。

第1図 エビヤ村の位置

第2図 ナイジェリアの主要農産物
島田(1983, p.133)より引用

ナイジェリアでは、南から北に向かうにつれ年間降水量は減少し、植生帯が、熱帯雨林帯からギニアサバンナ帯、スーダンサバンナ帯へと移行し、北端はサヘル・ゾーンとなる。農業経営はこうした自然環境に対応してなされており、それは栽培作物の種類からみて大きく二つのタイプに分けられる(第2図)。すなわち、ヤムイモ、キャッサバ等の栽培を中心とする南部の「根栽型」と、ミレット等の雑穀栽培が主体となる北部の「雑穀型」である(端, 1969, p.1-8)。また、輸出用換金作物栽培についてみても、南部と北部では大きく異なる。3大輸出作物の栽培地域をみると(第2図)、オイルパームとカカオの栽培は南部の熱帯雨林地帯でみられ、北部では落花生の栽培が盛んである。エビヤ村の地域は「根栽型」と「雑穀型」のちょうど境界領域であり、両方の作物を組合せた多様な作付がみられる。作付方式は叢林休閒(bush-fallow)方式、すなわち耕作と休閒を数年間隔で繰り返す方式である。

第3図にはエビヤ村とその周辺の地形図を示した。エビヤ村の標高は約270mであり(地形図の

第3図 エビヤ村とその周辺の地形

1964年発行の5万分の1の地形図「Kabba S. E.」の一部

等高線はフィート表示。①～③はA家、④～⑥はB家の耕作地の位置

標高はフィート表示), ゆるやかな起伏をもつ平原上に位置している。第3図には示されていないが, 現在では村の南部をかすめとって高速道路が走っており, 村の中央を通る未舗装の旧街道沿いに家屋が立ち並んでいる。殆んどの家が土レンガ作りでトタン葺きの平屋建てである。また村の中には, 小学校が一枚, 教会が一枚, そしてモスクが三つ建っている。

このエビヤ村を含むニジェール・ベヌエ低地帯は, イグビラ人¹⁾の居住地域であり, 彼らは昔から他地域へ盛んに労働力を移動させてきたことで知られている (Galletti et al., 1956, p.217; Adeg-

boye, 1966, p.450)。この地域からの出稼ぎが最も盛んであったのは, 1930, 40年代のヨルバランドにおけるココアブームの時である。この時, この地域の人々は「ヤムイモ作りの名人」としてココア農民 (ヨルバ人) の人々に招かれてヨルバランドにでかけた。彼らは, ヨルバランドにおいて農業労働者として働く一方, 機会をみつけて, 食糧生産農民, 換金作物生産農民へと転化し, 60年代にはヨルバランドにおいても生活の拠点をもつに至っていた。いわば, イグビラランドの故郷を基地として他地域に幾つもの生活拠点をもつ「蛸足構造」の社会を作っていたといえる。

1985～86年にエビヤ村で労働力移動の調査を行った島田によると、70年代のオイルブーム時代にこれらイグビラ人の「蛸足構造」も大きな変化を遂げるようになった（島田，1987，1989）。その変化とは、(1)若年層の都市への移動の増大、(2)非農業部門への就業の増大、(3)都市居住者からの送金をもとにした農村子弟の高学歴化、(4)その結果生じる非農業従事者の再生産である（島田，1987，1989）。今回の調査の目的は、このような「蛸足構造」の変化の中で、故郷の農村の農業生産がどのような変化を遂げていたのかを知ることにある。

現地調査は1989年8月から9月にかけて行われた。調査時におけるエビヤ村の総戸数は105戸²⁾であった。島田（1987，p.191-194）によると、村全体の約3分の2が農家世帯であり、他は教員・公務員世帯、商人世帯、賃金労働者世帯、職人（靴製造等）世帯などである。

Ⅲ. エビヤ村の農業経営

本章では、エビヤ村の農家を個別に訪問して行った聞き取り調査の結果について、特に栽培作物と農作業の労働力について述べる。この調査は、エビヤ村出身の調査協力者がイグビラ語を用いて聞き取りし、その結果を英語で調査票に記入するという方法でなされた。有効回答数は40戸であり、これは村の全農家数の約3分の2に当たる。

1 栽培作物

まず、各農家の栽培作物についてみることにする。調査の結果、第1表に示した計18種類の作物名があげられた。農家ごとに栽培作物の種類は若干異なるが、キャッサバとヤムイモ（多くは *Dioscorea rotundata* または *D. cayenensis*）はほとんど例外なく栽培されており、主食作物としてのこの2種の重要性が明らかである。次に栽培農家比率が比較的高いのは、メイズ（とうもろこし）、ビーンズ（ささげ）、ソルガム、落花生、メロン、唐辛子、野菜であり、キャッサバ、ヤムとこれらを合わせて、エビヤ村における主要農作物といえよう。これら以外のココヤム ウォーターヤム (*D. alata*)、ベ

ニシード、オクラなどは、栽培比率がかなり低くなっている。このように、エビヤ村では南部ナイジェリアの「根栽型」作物と北部の「雑穀型」作物の両方がみられ、両者の境界領域としての特性をよく表わしている。一方、ヨルバランドで多くみられる換金用の樹木作物はほとんどみられない。カシューナッツとカスターシードを栽培しているという例がわずかにあるのみである（第1表）。

これらの作物が主に自家消費用かあるいは販売用かという点について検討してみると、作物ごとにかなり明確な特徴を示していることがわかる（第1表）。第一に、圧倒的に自家消費される比率の高いのはヤムイモ、唐辛子、野菜である。ヤムイモは伝統的な主食作物であり、唐辛子、野菜はそれに添える調味料として重要である。逆に販売の比率が高いのは、キャッサバ、ビーンズ、ソルガム、落花生、メロン³⁾である。また自家消費と販売とが相半ばするものとしてメイズがあげられる。このように、栽培されている作物は単に自給用というだけでなく、マーケットなどで販売される場合が比較的多いことがわかる。

マーケットは、村のほぼ中央部にある広場で一日おきに開かれている。1989年8月26日に観察した例でいえば、それは朝の6時30分頃に始まり、正午頃まで続けられた。物品の売買は完全に自由で、手数料はとられない。店を開いていた売り手は約50人ほどであり、そのほとんどが食品（農作物、魚の干物、調味料、おかしなど）や日用雑貨（石鹸、マッチ、薬、化粧品など）を扱っていた。マーケットの参加者はエビヤの住民だけでなく、近隣の村やオケネからも多くの人々がやってきている。彼らは農作物を扱う専門の業者であり、村で収穫された作物をここで買い集めていくようである。農産物の買上げを行う業者の中には、市場を利用せず、直接農民から農産物を買集めていくという場合もある。エビヤ村の南をかすめ通っているハイウェイまで村人が農産物を運び、それを業者が買い取っていくという例である。エビヤ村で栽培された換金作物は、こうした流通経路を通して商品化されている。

第1表 エビヤ村の栽培作物

(聞き取り調査による)

No	キャブ ハ	ヤマ ハ	ココ ヤム	ウオ-タ -ヤム	メイズ ズ	ビ-ン ズ	ソル ガム	落花 生	ヘ-ニ -ト	メソ オラ	唐辛 子	ガ-デ ンツク	野菜	カユ- リ-フ	ビ-タ- リ-フ	お-お ホ	カスチ- シート
1	HS	HS			HS	HS	HS	HS	HS	HS					HS		
2	HS	HS			HS	HS	HS	HS	HS		HS		HS	HS			
3	HS	HS	HS		HS		HS	HS	HS				HS	HS			
4	HS	HS			HS	HS		HS	HS	HS	HS		HS				S
5	HS	HS	HS		HS		HS		HS								
6	HS	HS					HS	HS									S
7	HS	HS			H								H				
8	HS	HS			HS		HS	HS		HS	HS		HS				S
9	HS	HS	H			HS		HS	HS	HS	H					H	
10	HS	HS		HS	HS				HS	HS	HS	HS					
11	HS	HS			HS	HS				HS	HS	H		H			
12	HS	HS		HS	HS	HS				HS	H	H					
13	HS	HS	HS		HS	HS	HS			HS	HS				HS		S
14	HS	HS			HS			HS	HS		HS		HS				S
15	HS	HS			HS		HS		HS			HS					
16	HS	HS	H	H		HS				HS	H		H				
17	H	HS		H	HS						H		HS				
18	HS	HS			HS		HS		S							H	
19	HS	HS				S	HS	HS	HS	HS	H	HS	HS				
20	HS	HS	HS				HS	HS	HS		H	HS	HS			H	S
21	HS	HS			HS	HS	HS	HS	HS			S					
22	HS	HS			HS	HS	HS		HS	HS	H		H				
23	HS	HS			HS	HS	HS	HS	HS		HS						
24	HS	HS	HS	HS	HS	HS			HS	HS	HS		HS				
25	HS	HS			HS					HS	HS		HS				
26	HS	HS			HS					HS	HS		HS				
27		H						HS	H				HS				
28	HS	H			H				H								
29	HS	HS	HS			HS			HS	HS	HS		HS				S
30	HS	HS			HS				HS	HS			HS				
31	HS	HS								HS	HS		HS				
32	HS	HS	HS		HS		HS				HS		HS				
33	HS	HS	H	H	H					HS	H		HS			H	
34	HS	HS				HS	HS	HS		HS	HS				HS		
35	HS	HS			HS					HS	HS		HS				
36	HS	HS				HS	HS	HS		HS	HS		HS				S
37	HS	HS			HS	HS				HS	HS	H					
38	HS	HS			HS		HS			HS	HS	HS					
39	HS	HS	HS	HS	HS		HS	HS	HS		HS						
40	HS	HS			HS					HS	HS						

H：自家消費、 S：販売

大文字が主たる用途を表す

2 農業労働力

次に、農作業の労働力について検討してみる。農作業種類（耕地整理、火入れ、植え付け・播種、鳥追い、除草、収穫）別に労働分担者をまとめて示したのが第2表である。まず、最も重労働とされる耕地整理作業についてみると、農業労働者を雇っている農家が非常に多く、全体の80%以上を占めている。この作業の場合には約半分の農家で世帯主が主たる労働力となっているが、農業労働者が最も重要な担い手となっているという例も約3分の1を占めている。また除草作業においても農業労働者を雇っている場合が多く、約9割を占める。ここでいう農業労働者とは、出来高払いで働く労働者であり、同じ村の人の場合もあるが、遠く東部ナイジェリアから来ている移動労働者もいる。これらの移動労働者の中には、各地域を移動しながら農作業を請け負っている専業労働者もいる。彼らは、雨季の初めの耕地整理の季節には、出稼ぎ先の村の農家に寄宿しつつ、村を転々と移動している。

次に他の農作業についてみると、それらは農業労働者依存はあまり高くなく、ほぼ伝統的な性別分業に従って実施されていることがよみとれる（第2表）。つまり、火入れと、ヤムイモ、キャッサバの植え付けはほとんど世帯主によってなされており、これらの作業が今でも「男の仕事」として行われていることがわかる。逆に世帯主の妻は、ヤム、キャッサバ以外の作物の播種の多くを担っている。さらに、第2表では省略したが、収穫においても、こうした作物別の役割分担が植え付け・播種と同様になされているという場合が多い。

また、伝統的な互助組織（イグビラ語で *Atoopa*）についてみると、それが機能しているという場合は耕地整理作業である程度みられるものの、全体の4分の1にすぎない。この *Atoopa* は、農業において共同作業を行う（いわば「結い」を行う）グループであり、同一年齢階級の人々の間で結成されることが多く⁴⁾、クラン横断的である。この互助組織の活動が以前はどうであったかという点については明確ではないが、聞き取りによれば、組織は以前と比べて弱体化したという。

これらの調査結果の中で特に注目されるのは、雇用労働力への依存度の高さである。過去の農業経営の実態がわからない以上、農業の変化について安易に類推するのは危険ではあるが、以前に比べて雇用労働力依存が強まったことは聞き取り調査によっても裏付けられている。

エビヤ村を含むイグビラ地域は、かつてはヨルバ人のココアベルトへの労働力の供給源であった（Berry, 1975, p. 78, 136）。そのような豊富な余剰労働力を抱えていたこの地域の農業が、現在では逆に外部の農業労働力に依存しているのである。島田（1987, 1989）にみられる、エビヤ村出身者の労働力移動の調査結果が示すところから判断するに、ここで観察されたエビヤ村の農業経営にみられる労働力不足という事態は、70年代のオイルブームに伴う若年労働力の村外流出によって生じたものと理解できるであろう。

Ⅳ. 事例農家の農業経営分析

本章では、エビヤ村の農家の中から任意に選んだ2戸の農家の農業経営について、耕作地の実測調査と聞き取り調査の結果から考察を加える。この調査は、前章で述べたようなエビヤ村の農業が具体的にどのように展開されているのか、それを数量的に把握するために行ったものである。測量においては、家族全体の耕作状況を把握している立場の人に全ての耕作地を案内してもらい、プランコンパスと巻尺による簡易三角測量法を用いた。

1 耕作地と労働力

対象農家のA家とB家が調査時に何らかの作物を作付していた全ての耕作地を第4図に示した。このうち①～③はA家、④～⑥はB家の耕作地である。このように両家の耕作地とも3地点にまとまって分布しており、それらはエビヤ村から1～2 kmの距離にある（第3図参照のこと）⁵⁾。

対象地域の土地所有についてみると、エビヤ村では、この地を最初に切り拓いた人の子孫から成る3つのクランが土地の所有権をもっており⁶⁾、

第2表 農作業の労働力

(聞き取り調査による)

No	耕地 整理	火 入れ	植え付け・播種										鳥 追い	除草	収穫
			キャ バ	ヤマ モ	メ イ	ビ ン	ソ ル	落 花	メ ン	オ ウ	唐 辛	野 菜			
1	LH	M	M	M	FM	FM	FM	FM	FM	FM				LH	FMS
2	MSL	FMS	M	M	FSM		FSM	FMS	FSM		MFS	FMS	SH	MSL	F S M
3	MSL	M S	MS	M	SFM			MSP	SFM			SFM	SH	MSL	F S M L
4	MLS	SMF	ML	ML	FSM	FSM		MFS	FSM	FSM	FSM	FS	S	MSL	FSM
5	ML	MF	M	M	F M		F M		F M				M	ML	F M
6	MLS	M	M	M			F M							ML	F M
7	LH	M	ML	M	MF									LH	MLF
8	SLM	M S	M	M	F M		F M	FM	M F		FM	FM	MS	MSL	FMS
9	ML	MF	M	M		FM		FM	FM	FM	FM			M L	FM
10	MJS	SM	M	M	M S				M S	M S	MS		M	MSL	FSM
11	LH	SM	MS	MS	MSF	MSF			MFS	MFS	FMS	MFS	SH	MSL	FSM
12	MLS	M	M	M	FM		FM		FM	M	M		M	MLS	F M
13	MJL	MF	M	M	FM	FM	FM		FM		F M		M	M J	FM
14	M J	M	M	M	MF			MF			MF	MF		ML	FM
15	ML	M	M	M	M		M L							ML	M L
16	M L	M	M	M	FM	FM			FM		FM		M	ML	MF
17	LH	FM	M	M	FM						FM	FM		LH	FM
18	SML	SM	M S	M S	MFS				MFS	M S			SH	SM	SFHL
19	MJ	M	M	M		MF	MF	MF	MF	MF	MF	MF		MJL	MF
20	M L	M	M	M			FM	FM	FM		FM	MF	SH	MSL	F S M
21	LH	M	M	M	M	M	M	M	M					ML	M L
22	ML	M	M	M	FM	FM	MF		MF	FM	FM	FM		ML	FM
23	LMS	MS	LH	LH	MF	MF	MF	FM	MFS		FM			LMS	FMSL
24	LH	M	M	M	FM	FM			FM		FM	FM	M	ML	FM
25	LMS	M F	LH	LMS		FM			FM	FM	FM			L H S	FML
26	LMS	MF	M	M	FM				FM		FM	FM		ML	F M
27	LMS	M		M				FM				FM		LMS	FMS
28	FS	FS	F	F	F				F				SF	LFS	FS
29	LH	FM	M	M	F M	F M			F M		F M			ML	FM
30	ML	M	M		MF				MF	MF			M	ML	MFL
31	L	F	L	L					F		F	F		L S	S P
32	MJS	MS	M S	M	M S		M S				M	M	M	M L S	MLS
33	LH	M	M	M	F M				F M		M F	M		LH	F M
34	MJ	M	M	M		FM	FM	FM	FM	FM	FM		M	ML	FM
35	MJL	M	M	M	FM				FM		FM	FM		M	FM
36	MJ	MF	M	M		FM	FM	FM	FM	FM		M	MF	MLJ	FM
37	LH	M	MF	M	MF	MF			FM	FM	FM			LH	FM
38	ML	M	M	M	MF		MF		FM	FM	FM		M	ML	FM
39	MLJ	MF	M	M	FM		FM	FM	FM		FM			MJL	FM
40	MLJ	SM	M	M	FM				FM		FM			MSJL	F S M

M：世帯主、F：妻、S：子供、L：雇用労働者、J：共同作業

大文字が主たる労働力

第4図 作付パターン (現地調査による)

大きな記号は栽培作物 (Y: ヤム, C: キャッサバ, M: メイズ, B: ビーンズ, S: ソルガム, O: オクラ, m: メロン)

小さな記号は耕作地のNo. (A~Kは5図, 6図の耕作者に対応する)

①~③はA家, ④~⑥はB家の耕作地 (第3図に対応)

このクランに属さない農家はこれらのクランから用益権を得て農業を行っている。今回調査したA家、B家はともに非土地所有クランに属する農家である。土地所有クランに属さないこれら農家は、年に1日土地所有クランの農家の畑で農作業（耕地整理か収穫作業）を手伝うことになっている。この労働力の提供は用益している耕地面積に比例したものではなく、各農家とも一様である。

測量結果より計算すると、A家の耕作地は計188a、B家は計182aである⁷⁾。この数値を他の事例研究の結果と比べてみるとどうであろうか。島田（1976, p.37）は、1960年代に南部ナイジェリアで行われた事例調査の結果を一覧表にまとめているが、それによると、1世帯あたりの耕作地面積はおよそ130～160a程度であり、今回の調査結果と大きな違いはない。この2戸の農家の耕作地面積は、南部の熱帯雨林地帯で観察された農家1戸あたりの平均的耕作地面積と大差ないものであることがわかる。このことは、この地域の農業の土地生産

性が、南部の熱帯雨林でみられたそれと比べても、あまり大きな差がない可能性があることを示唆している。

次に、両家の農業労働力についてみる。第5図と第6図にはA家、B家の家族構成を示した。A家の場合、現在の世帯主の父が4人の妻をもっていたため、複雑な家族構成を示している。調査時点では1つの家に21人が同居していた。また、B家の家族構成はA家ほど複雑ではなく、同居者は10人である。この図でアルファベットの記号を付したのが、実際に農作業を担っている耕作者である。男子の場合は子供でも耕作者となっている例がみられる。「耕作者」とは、ある耕作地が「誰誰の畑」として家族から認められている人であり、子供（男子）でもやる気のある場合には耕作者として認められるようである。ただし、各耕作者が自分の畑での作業を全て行うとは限らず、家族間での手伝いがなされている。耕作者別に耕作地面積をまとめてみると、A家では、A氏（20歳）が

第5図 A家の家族構成（聞き取りによる）

第6図 B家の家族構成（聞き取りによる）
凡例は第5図と同じ

40%の耕作地を保有し、次いでB氏（52歳、世帯主）が31%、C氏（45歳、世帯主の妻）が15%で、残りの14%が他の4名の分担である。B家の場合は、H氏（21歳）の耕作地が42%を占め、I氏（49歳、世帯主）が36%、J氏（35歳、世帯主の妻）が12%、そして子供のK氏（9歳）が10%を受け持っている。このように、両家とも若年労働力が農作業の基幹的な担い手として機能していることがわかる。先述した雇用労働力依存という対象地域の農業の現況の中では、この2戸の農家は、比較的労働力構成が充実している事例といえよう⁸⁾。

2 作付パターン

第4図に記号で示した作物は、A家とB家で、調査の時点およびその前の1年間で栽培された作物である。このように、ほとんどの畑が複数の作物を組み合わせた混栽畑となっている。前章で述べたように、農家に対する聞き取りでは計18種類の作物名が得られたが、この両家における栽培作物の種類はあまり多くない。A家では、ヤム、キャッサバ、メイズ、ビーンズ、ソルガム、メロン、オクラの計7種の作物がみられる。B家の栽培作物はより少なく、ヤム、キャッサバ、メイズ、ソルガム、メロンの5種である。

作付パターン別の作付面積は第3表に示した。A家とB家では作付パターンがかなり異なってお

第3表 作付パターン別作付面積

作付パターン		(現地調査による)			
		A家		B家	
		作付面積 (a)	全耕作地に対する比率 (%)	作付面積 (a)	全耕作地に対する比率 (%)
単作	C	42.7	22.7		
	B	5.7	3.0		
	O	0.5	0.3		
	m	8.3	4.4		
2種混作	Y+C	13.2	7.0	54.6	29.9
	C+m	5.8	3.0	14.2	7.8
	C+B	46.0	24.4		
	C+M			10.8	5.9
	C+S			18.9	10.4
	B+S	33.0	17.5		
	M+S			12.6	6.9
	m+S			22.5	12.3
3種混作	C+S+B	12.4	6.7		
	C+S+O	0.5	0.3		
	C+S+m			48.9	26.8
	M+S+m	9.5	5.0		
4種	Y+C+M+O	10.8	5.7		
計		188.2	100	182.5	100

Y：ヤムイモ，C：キャッサバ，M：メイズ，
B：ビーンズ，S：ソルガム，O：オクラ，m：メロン

り、単作はA家のみにみられる。2種混作では、A家の場合、キャッサバ+ビーンズあるいはビーンズ+ソルガムの組み合わせが多いが、このいずれもB家ではみられない。B家で卓越しているパターンはヤム+キャッサバである。また3種混作の場合、B家ではキャッサバ+ソルガム+メロンの比率が高いが、このパターンはA家ではみられない。4種混作はA家で1パターンみられるのみである。これらを通して、A家、B家に共通して指摘できることは、キャッサバの作付が多いという点である。

そこで次に、作物別作付面積比率を第4表に示した。これより、キャッサバの作付が卓越していることが明瞭によみとれる。A家の場合は全耕作地の70%（のべ面積で計算すると36%）、B家では81%（のべ面積では36%）にキャッサバが作付されている。A家の場合、作付比率でこれに次ぐのがビーンズ、ソルガムであり、B家ではソルガム、メロンである。これらの調査結果を、1960年代の

第4表 作物別作付面積

(現地調査による)

作物	A家			B家			Agboola (1979)による 作付率(%)
	作付 面積 (a)	のべ面積 に対する 比率(%)	実面積 に対する 比率(%)	作付 面積 (a)	のべ面積 に対する 比率(%)	実面積 に対する 比率(%)	
ヤムイモ	- 24.0	6.6	12.7	- 54.5	13.2	29.9	10~29
キャッサバ	42.6 88.5	36.0	69.6	- 147.2	35.6	80.8	5~9
メイズ	- 20.3	5.6	10.8	- 23.3	5.6	12.8	~9
ビーンズ	5.7 91.5	26.8	51.6	- -	0	0	?
ソルガム	- 55.6	15.3	29.5	- 102.8	24.9	56.4	10~29
メロン	8.3 15.1	6.5	12.4	- 85.6	20.7	47.0	
オクラ	0.5 11.3	3.2	6.3	- -	0	0	
計	363.4	100		413.4	100		

作付面積は上段が単作，下段が混作

Agboola (1979) のデータは1963~70年の調査による。これは実面積に対する比率である。

データをまとめた Agboola (1979, p. 56, 59, 79, 86) の数値と比べてみると (第4表), キャッサバ栽培の増大が際立つ。他の作物ではソルガムも増加傾向であり, またヤムやメイズについてはあまり変っていない。

以上のことより, 70年代以降にみられた農業経営の大きな変化の一つとして, キャッサバ栽培の増大をあげることができる。キャッサバ栽培面積の増大はナイジェリア全土でみられる現象であるが, このエビヤ村でもそれが明確に認められた。キャッサバは労働節約的作物であり⁹⁾, この点は先述した農業労働力不足という事態に対応する。また, 前章で述べたようにキャッサバの多くは販売用として栽培されている。キャッサバは粉末のガリに加工すれば貯蔵, 販売が容易であり, また都市部の低所得者層に好まれているため, 現金収入に結びつきやすい。この点も栽培増加の原因になっているものと思われる。

3 農作業暦

第5表に, 聞き取りの結果明らかになったA家, B家の各耕作地における農作業暦を示した。ここでは各耕作地ごと, 各作物ごとに, 植え付け・播種と収穫の時期について聞き取りした。対象地域では, おおよそ3月~10月が雨季で, それ以外が乾季といつてよい。この地域では基本的に, 南部ナイジェリアでみられるような同一作物の1シーズン2作はなされていない (第5表)。

第5表より明らかなように, 雨季の初めの3~4月に播種を行い7~8月に収穫する, あるいは6月頃に播種を行い雨季の終わりの10月頃に収穫するという例が多い。前者に該当する作物がメロンであり, 後者の代表がソルガムである。また, メイズとビーンズについては両方の作付がみられる。これらの作物については, 農作業の基本的形態は現在も変わっていないといえる。幾つかの耕作地 (第5表中のA1, A2など) では11~12月

第5表 農作業暦（聞きとりによる）

No	面積 (a)	作物	乾季 ← 雨季 → 乾季											
			1988		1989									
			11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
A家	A1	10.8	Y C M O	(Y) (C)			(M) (O)					(Y)		(Y)
	A2	2.8	C	(C)										
	A3	7.3	C B											
	A4	2.7	C											
	A5	3.3	C B											
	A6	9.9	B S									(B)		
	A7	12.3	B S									(S)	(B)	
	A8	7.0	C											
	A9	10.8	C B											
	A10	7.6	C B									(B)		
	B1	3.3	C B S									(B)		(C)
	B2	2.3	C B S									(B)		
	B3	3.9	B S											
	B4	4.9	C B									(B)		(C)
	B5	6.8	C B S									(C)		
	B6	5.6	C	(C)										
	B7	0.5	O									(O)		
	B8	4.7	C	(C)										
	B9	6.9	B S									(S)		
	B10	10.4	Y C	(Y)								(Y)		(C)
	B11	9.5	M S m									(M)		
	C1	8.3	m									(m)		
	C2	5.6	C m									(m)		
	C3	8.6	C											
	C4	5.9	C											(C)
	D1	0.5	C S O									(C)		
	D2	3.6	B									(O)	(B)	
	D3	2.1	B									(B)	(B)	
	E1	2.8	Y C	(C)	(Y)							(Y)		
	E2	5.4	C	(C)										
	F1	4.4	C B									(C)	(B)	
	G1	1.8	C B									(C)	(B)	
	G2	5.9	C B									(C)	(B)	
B家	H1	18.6	C S m									(S)		
	H2	30.3	C S m									(S)		
	H3	3.0	M S									(M)		
	H4	9.6	M S									(M)		
	H5	14.2	C m									(m)		
	I1	10.8	C M									(M)		
	I2	39.5	Y C									(Y)		
	I3	15.1	Y C									(S)	(C)	
	J1	22.5	S m									(m)		
	K1	18.9	C S									(S)		

記号は第4図と同じ。○が播種・植え付け、()が収穫。

に植え付けがなされているが、これらは、小河川の近くの低湿地にあり乾季にも十分な水が得られる畑に限られている。また、キャッサバは上述の作物よりも成育期間が長い、その植え付け、収穫の季節についてみると、非常にランダムであり、明確な規則性は認めがたい（第5表）。

今回の調査では、各耕作地がそれぞれ耕作何年目であるのか確認するには至らなかったため、作付のローテーションの全体像は把握できていない。その中で、耕作初年度と確認できたのが、第5表中のA1, B6, B10, B11である。これらのうち、B11を除いていずれの場合も耕作初年度からキャッサバが植えつけられている（第5表）。キャッサバは本来休閑に戻される畑に植え付けられ、耕作期間の延長に寄与してきた（島田, 1976, p. 42-44）といわれていたが、この地域の現在の農業にはそれが当てはまらない。つまりエビヤ村の農業は、その作付ローテーションにおいても変容を遂げたものと思われる。このように、エビヤ村の農業においてキャッサバ栽培の比重が以前と比べて増大したのは明らかであり、それは前述した作付面積においても明確に認められる。そして、それに伴い農作業サイクルの内容も変化したといえよう。

V. おわりに

本研究では、出稼ぎ者を多数排出している中部ナイジェリアの一農村、エビヤ村を事例にとり、ここにおける農業経営の現況を具体的に明らかにすることを通して、1970年代以降のナイジェリア農村でみられた農業変化の一断面を探ろうと試みた。

調査の結果明らかになったことは、以下のようにとまとめられる。

1) 南部ナイジェリアの「根栽型」と北部の「雑穀型」の両方の性格をもつエビヤ村の農業では、栽培作物が多様であり、その中では、キャッサバが換金用作物として重要な作物となっている。

2) 農業労働力についてみると、雇用労働者依存が不可欠になっている。その一方で伝統的な互助

組織が果たしている役割は小さくなっている。

3) 耕作地の実測調査の結果、2戸の農家が耕作している畑地の面積は約1.8aであり、両家とも、世帯主とその息子が中心的労働力となっている。

4) この2戸の耕作地では、単作から4種混作までの作付パターンがみられる。作物別にみるとキャッサバの作付が卓越しており、60年代の調査データと比べてみると、その栽培面積比率は大きく増加している。

5) 農作業暦をみると、雨季の初めの植え付け・播種から雨季の終わりの収穫にいたる基本的パターンは変化していない。ただしキャッサバについては規則性は認められず、それは耕作初年度から積極的に栽培されている。

以上の調査結果と、1970年代のエビヤ村における労働力移動の調査結果（島田, 1987, 1989）とにより、以下のことが推察されよう。つまりエビヤ村の農業は、70年代に、オイルブームに伴う若年労働力の村外流出が進む中で、雇用労働力への依存を強めるようになった。そして同時に、労働節約的作物であるキャッサバの作付面積増大が示すように、労働粗放化の傾向を強めた¹⁰⁾。その結果、作付ローテーションの内容にも変化が生じた。

ところで、エビヤ村には、中学校を終えた若者が少なからず留まっていたが、互助組織の役割の低下にみられるように、彼らは未だ農村の新しい基幹労働力として農業の再活性化の原動力にはなっていないという点も明らかになった。これらのことは、オイルブームの70年代に起きたエビヤ村の農業耕作形態上の変化の方向性、すなわち、農業から非農業部門へのシフト、農業の労働粗放化、賃金労働依存増大等の傾向が、経済不況が深刻になった80年代末になっても基本的には変わっていないことを示しているようである¹¹⁾。

謝 辞

本調査報告は、文部省科学研究費補助金による国際学術研究「社会・経済的諸条件の変化に対するアフリカ小農の反応」（研究代表者：矢内原勝、慶応大学教授）の成果の一部である。

ナイジェリアにおいては、イバダン大学地理学教室の Reuben, K. Udo 教授とその家族の皆様、在ナイジェリア日本大使館、日本貿易振興会ラゴス事務所の方々、その他多くの方々にお世話になった。調査地のエビヤ村では、Musa Audu 氏の協力を得、その家族の皆様には暖かくもてなしていただいた。以上の方々には心からの謝意を表したい。

なお、本稿は、1990年春季日本地理学会大会（於、東京大学）、および1990年日本アフリカ学会学術大会（於、東北大学）で発表した内容を骨子としている。

注

- 1) イグビラ人は、ナイジェリア全体で見ればマイノリティ・グループに入るが、クワラ州についてみれば、ヨルバ人と肩を並べる大集団である（島田, 1987, p. 208）。
- 2) 村内には小学校、村の北には中学校と高等学校が立地している。この場合の総戸数は、他地域の出身者で学校に勤務しているため村内に居住している場合も含めた数字である。
- 3) メロンは種だけが商品として取り引きされている。これはシチューの材料として重要である。
- 4) *Oyiopa* と呼ばれる年齢階梯グループは、*Ozueyi* (15歳以下の子供)、*Ezieomuha* (成人男子)、*Ozuorichi* (成人女子)、*Ozoku* (長老) の4つに分けられる。
- 5) 今回は休閑地については調査を行っておらず、エビヤ村における土地利用の全体は把握できていない。しかし、ここでは、一般に考えられているほど土地不足は深刻ではないようである。農民達に対する聞き取りでも土地不足を指摘する人はいなかったため、農業用地はいまだ余裕があるのではないかと考えられる。
- 6) Muhammed uhuache, Akaba, Avidime の3クランである。ちなみに耕作地の実測を行った2つの農家は、Eheda と Unokuta クランに属している。
- 7) 聞き取りによると、この2戸の農家とも、保有耕作地面積の規模では村内農家の中で中程度ということであるが、それを裏付ける資料はない。
- 8) しかしながら、A家のA氏（20歳）とB家のH氏（21歳）は共に高等学校卒であり、彼らは現在エビヤ村でもっぱら農業に従事してはいるものの、機会があれば（経済的余裕があれば）大学へ進学する、あるいは都市部へ移動したいという欲求が強い。彼等がこのまま村に留まり農業を続ける保障はない。
- 9) キャッサバは枝をさし木にして簡単に増やすことができる。さらに、マウンド作りや支柱立てなどの

作業を必要とするヤムに比べ、栽培に要する手間が非常に少なくてすむ。

- 10) 今回の調査では作付面積は把握したが、作物の生産量については検討していない。ここではキャッサバ作付の増大を農業における労働粗放化ととらえているが、「生産性」の視点から農業の変容を捉えるかどうかという点は不明である。
- 11) このようなエビヤ村でみられた現象が、単なる経済環境の変化と農民の反応の間にみられるタイムラグを意味するものか、あるいは農村社会の質的变化を意味するものかは、今後の調査をまたなければならないが、この調査と並行して実施した労働力移動の調査結果が示すところは、環境変化に対する反応の遅れを示すものというよりは、70年代のオイルブーム期にナイジェリア農村部が決定的な変化を遂げたことを示唆しているようである。

参考文献

- Adegboye, R. O., 1966. "Farm Tenancy in West Africa", *The Nigerian Journal of Economic and Social Studies*, 8-3.
- Agboola, S. A., 1979. *An Agricultural Atlas of Nigeria*, Oxford University Press.
- Berry, S. S., 1975. *Cocoa, Custom, and Social Economic Change in Rural Western Nigeria*, Oxford, Clarendon Press.
- Bohannon, Paul and Laura; 1968. *Tiv Economy*, Evanston, North-western Univ. Press.
- Boserup, E., 1965. *The Conditions of Agricultural Growth*, London, George Allen & Unwin.
- Essang, S. M., 1973. "The Land Surplus Notion and Nigerian Agricultural Development Policy", *West African Jour. of Agricultural Economics*, 2-1.
- Floyd, B., 1969. *Eastern Nigeria: a Geographical Review*, London, Macmillan.
- Galletti, R. et al., 1956. *Nigerian Cocoa Farmers; an Economic Survey of Yoruba Cocoa Farming Families*, Oxford, Oxford Univ. Press.
- 端 信行, 1969, 「熱帯焼畑農業の二類型 — 西アフリカ、ナイジェリアの事例を中心として —」『人文地理』21-4。
- Helleiner, G. K., 1966. *Peasant Agriculture, Government, and Economic Growth in Nigeria*, Homewood, Richard D. Irwin.
- Johnston, B. F., 1958. *The Staple Food Economies of Western Tropical Africa*, Stanford University Press.
- Netting, R. McC., 1968. *Hill Farmers of Nigeria; Cultural Ecology of the Kofyar of the Jos Plateau*, Seattle, Univ. of Washington Press.
- Norman, M. J. T., 1979. *Annual Cropping Systems in the Tropics: an Introduction*, Gainesville, University of Florida Book.
- Oculi, O., 1979. "Dependent Food Policy in Nigeria 1975-1979", *Review of African Political Economy*, 15/16.
- Oluwasanmi, H. A. and others, 1966. *Uboma: a Socio-economic and Nutritional Survey of a Rural Community in*

- Eastern Nigeria*, Geographical Publications.
- Prothero, R. M. (ed.), 1972. *People and Land in Africa, South of the Sahara*, London, Oxford Univ. Press.
- Shenton, B. and M. Watts, 1979. "Capitalism and Hunger in Northern Nigeria", *Review of African Political Economy*, 15/16.
- 島田周平, 1976, 「南部ナイジェリアの食糧生産増大過程に関する一考察」『アジア経済』17-12。
- 島田周平, 1983, 「ナイジェリアー石油ブーム下の食糧不足」, 長谷山崇彦・小島麗逸編『公開講座・第三世界の食糧問題』アジア経済研究所。
- Shimada, S., 1985. "Review of Studies on Agricultural Production in Nigeria", *Science Reports of the Tohoku Univ. 7th Series (Geography)*, 35-2.
- 島田周平, 1987, 「ヨルバランドにおけるイグビラ人の労働移動」, 昭和60・61年度文部省科学研究費補助金(総合A)研究成果報告書『第三世界をめぐるセグリゲーションの諸問題』, 一橋大学。
- 島田周平, 1989, 「70年代以降ナイジェリアの農村社会変容の一断面 — 労働力移動にみるエビヤ村の事例から — 」『人文地理』41-4。
- Simmons, M. and A. Obe (eds.), 1982. *The Guardian: Nigerian Handbook 1982-83*, Glasgow, Collins.
- Stanton, W. R., 1962. "The Analysis of the Present Distribution of Varietal Variation in Maize, Sorghum, and Cowpea in Nigeria as an Aid to the Study of Tribal Movement", *Jour. of African History*, 3-2.
- Udo, R. K., 1978. *A Comprehensive Geography of West Africa*, Ibadan, Heinemann Educational books Ltd.
- Udo, R. K., 1982. *Food Production and Agricultural Development Strategies in Nigeria*, Tokyo, Institute of Developing Economies.
- Uzozie, L. C., 1971. "Patterns of Crop Combination in the Three Eastern States of Nigeria", *The Journal of Tropical Geography*, 33.
- Wallace, T., 1980. "Agricultural Projects and Land in Northern Nigeria", *Review of African Political Economy*, 17.